

2021年度 文学部プロジェクト研究 研究活動報告書

	職名	教 授	氏名(代表者)	遊 佐 徹	配分額	
プロジェクト名	レジリエンスの表象と文化					
目的と活動の概要	<p>【研究の目的】 我が国における新型コロナウイルス感染症の収束には今しばらくの時間が必要なようであるが、世界はすでにコロナ後に向けて動き出しているといえる。その動きはともすれば経済的指標のみで語られがちであるが、私達には今後様々なレベルでの立ち直りも必要となることであろう。その際立ち直りの重要な指針、手掛かりとなるのが、過去において文明や社会に壊滅的な打撃を与えた戦争、疫病、自然災害を人類が乗り越えてきた事実、歴史である。本プロジェクトではその克服の過程を記録した様々な地域、時代の文化現象、文化遺産について検討し、人文知のなかに幅広くコロナ後を生きてゆくための知恵と指針を見出すことを目指す。</p> <p>【活動の概要】 1月19日に10番講義室において松下正和（神戸大学地域連携推進本部准教授）氏をメインスピーカーとする講演会「災害記念碑を活かした地域住民による自主防災活動についてー日本史研究者が支援できること」を開催した。総括討論では、研究メンバー3名の研究フィールドから関連事例の報告も行った。</p> <p>【成果と今後の展望】 プロジェクトメンバーの個々の研究成果には以下のものがある。</p> <p>○<u>吉田 浩</u> スターリンによる抑圧や第二次世界大戦でのトラウマにたいするレジリエンスをソ連人がいかに示したかに関する資料調査を国立国会図書館等でおこなった。また、「北方領土問題を歴史的に考える」（『岡山大学文学部紀要』第74号(2021)、11-24頁）を公表した。</p> <p>○<u>松岡弘之</u> 国立療養所長島愛生園・邑久光明園（岡山県瀬戸内市）の資料調査に取り組み、特にアジア・太平洋戦争期における職員「顕彰」や療養所における当事者運動の戦後の再建過程を考察することで、レジリエンスの問題群を疾病をめぐる社会動態と関連づけながら考察した。あわせて、療養所に歴史資料として所蔵されている運営関係記録の保存や公開に関する諸課題を検討した。その成果は科学研究費若手研究「戦後ハンセン病療養所における入所者運動の成立ー長島愛生園を事例にー」（令和4～8年度、直接経費総額330万円）の獲得につながった。また1、「婦長殉職之碑とその周辺ー戦時ハンセン病療養所における職員「顕彰」ー」（『歴史評論』855号、62-72頁、2021年7月）、2、「書評 清水寛『太平洋戦争下の国立ハンセン病療養所ー多磨全生園を中心に』」（『障害者問題研究』49(4)、78-79頁、2022年2月）、3、「公文書」（天野真志・後藤真編『地域歴史文化継承ガイドブック 付・全国資料ネット総覧』文学通信、60-75頁、2022年）を公表した。</p> <p>○<u>遊佐 徹</u> 歴史的に中国が日本から被ったダメージとそれからの回復の状況について国会図書館関西館等の機関に赴いて調査を実施した。それらを活かした研究成果として1、「フィンガーボウルと李鴻章（4）」（『岡山大学文学部紀要』第74号(2021)、81-94頁）、2、「馮夢龍と倭寇物語（上）」（『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第52号(2021)、41-52頁）を公表した。また、また調査の結果を踏まえた申請によって科学研究費（基盤研究（C）「明清通俗文学における日本・日本人イメージの研究」2022～2024年）の採択を得た。</p> <p>★今後の展望 「表象と文化」の研究プロジェクトを引き続き展開させたい。そのために新たなメンバーを加える等、研究チームの充実を図ることも視野に入れている。研究テーマとしては現在の国際情勢に鑑み「ポストグローバリズム状況下における国際秩序の表象と文化」（仮）を考えている。新年度には市民、学外者を交えた研究およびシンポジウム等の活動が再開されると期待できるため、それを踏まえた計画を立てたいと考えている。</p>					

	氏 名	所 属 ・ 職 名	役 割 分 担
関係教員等 (代表者※印)	吉田 浩 松岡弘之 ※遊佐 徹	西洋史学領域・准教授 日本史学領域・講師 中国言語文化領域・教授	予算管理担当 シンポジウム・ワークショップ担当 研究代表

2021年度 文学部プロジェクト研究 研究活動報告書

	職名	准教授	氏名(代表者)	松村圭一郎	配分額	
プロジェクト名	イメージの人文学					
目的と活動の概要	<p>[研究の目的] 本プロジェクト研究では、人文学の幅広い研究対象を私たちの生のなかの現れとしての「イメージ」ととらえ、文字やことばに偏重した人文学とは異なる地平をいかに切り開けるか、21世紀にふさわしい総合的な人文学に向けたさまざまな実験的試みのプラットフォームとなることを目指す。</p> <p>[活動の概要] 2021年度は、コロナの影響もあり、一般向けの公開講演会は開催できなかったものの、2回の学内限定の映画上映会および、2回のオンライン・シンポジウムを開催した。いずれの企画も参加者から好評で、文学部の学生に多様な学びの機会を提供するとともに、文学部の先進的な取り組みを社会に発信することができた。</p> <p>①2021年7月29日(木) 17:00~20:00 岡山大学津島キャンパス文法経講義棟2階 20番教室 民族誌映画「カナルタ 螺旋状の夢」上映会 +講演: 太田光海監督(オンライン出演)「民族誌映画とフィールドワークについて」 参加者: 文化人類学・芸術学の学生、教員を中心に40名程度</p> <p>②2021年11月22日(月) 17:30~20:30 岡山大学津島キャンパス文法経講義棟2階 20番教室 ドキュメンタリー映画「街は誰のもの?」上映会 +講演: 阿部航太監督「ストリートをどう記録・撮影するか」 参加者: 文化人類学・芸術学の学生、教員を中心に30名程度</p> <p>③2021年12月23日(木) 18:00~20:00 オンライン・Zoomウェビナー開催 「芸術のプロトタイプとプロジェクトの社会——現代芸術の現在」 対談: 池田剛介(美術作家)+岡本源太(岡山大学・美学) 参加登録者数: 72名(学内および学外の一般参加者を含む)</p> <p>④2022年2月 オンライン・シンポジウム・Zoomウェビナー開催 「日韓ソ映画における団地イメージの変遷」 パネリスト: 今井瞳良(日本映画、団地表象論)+崔盛旭(日韓映画史) +本田晃子(本学教員)、コメンテーター: 大山顕(写真家・ライター) 参加登録者数: 254名(学内および学外の一般参加者を含む)</p> <p>[成果と今後の展望] 本プロジェクト研究は、一般向けの公開イベントなどの開催をとおして、学生たちに授業以外の学びの機会をつくとともに、文学部の複数の領域の教員が連携して学内外に情報発信をする機会をもうけることを目指している。今年度は昨年度から準備を進めてきたZoomウェビナーでのオンライン開催などによって、4つの企画を実現できた。いずれの企画もメンバー教員の領域である文化人類学や芸術学とも関連が深く、参加した学生や一般の参加者が活発に議論を交すなど、授業以外に別の教育の機会をもうけるという目的も達成することができた。今後も異なる専門分野のメンバーによる実験的な企画をとおして、文学部のあらたな教育・研究の可能性について領域横断的に発信する機会をつくっていきたい。</p>					

	氏 名	所 属 ・ 職 名	役 割 分 担
関係教員等 (代表者※印)	岡本 源太	文学部・准教授	オンライン対談③企画・運営
	中谷 文美	文学部・教授	上映会①企画・運営
	本田 晃子	文学部・准教授	オンライン・シンポジウム④企画・運営
	松村 圭一郎※	文学部・准教授	上映会②企画・運営

2021年度 文学部プロジェクト研究 研究活動報告書

	職名	教授	氏名(代表者)	藤井 和佐	配分額	
プロジェクト名	個人・ジェンダー・大学／アカデミアの交差					
目的と活動の概要	<p>[研究の目的]</p> <p>本研究プロジェクトは、文学部内の複数領域の教員から構成され、学際的観点からジェンダー研究の最前線について継続的に研究を重ねてきたものである。本研究課題は、全学的にSDGsの推進が謳われる中、目標5「ジェンダー平等を実現しよう」に直接かかわる内容である。学内に限らず一般市民も対象とした企画を継続的に実施してきたこれまでの実績を生かし、第4期中期計画期間中のとりまとめも念頭におきながら、「ジェンダーの多層性に関する領域横断的研究」の総括をめざす。</p> <p>[活動の概要]</p> <p>本年度は、昨年度に引き続き「個人・ジェンダー・大学／アカデミアの交差」に着目し、本学部とゆかりのある研究者によるインタビュー形式を含む2回の半公開講演会を文明動態学研究所の共催を得て開催した。それを通してライフヒストリーを記録し、共有し、未来を考えることを志した。</p> <p>1)「渥美冷子先生をお招きして」2021年11月10日(水)16:00-18:00</p> <p>岡山大学文学部で長年教鞭をとられた渥美冷子名誉教授を講師とし、アメリカ、オーストラリア、日本で研究と教育に携わってこられたご経験の中から、個人史とジェンダーが交差する地点を探った。参加者18名(文学部教員にのみ広報し、一般参加は渥美先生の関係者に限定した)。</p> <p>2)「倉地克直先生をお招きして」2021年12月8日(水)16:00-18:00</p> <p>昨年度に引き続きシリーズ3回目(最終回)は、倉地克直名誉教授・特任教授を講師とし、女性史とのかかわりやジェンダーにかかわるオムニバス授業の運営・展開などから個人史とジェンダーが交差する地点を探った。参加者12名(文学部教員にのみ広報した)。</p> <p>[成果と今後の展望]</p> <p>文学部プロジェクト研究の創設当初より継続してきた本研究プロジェクトを総括する形の冊子体研究報告書『個人・ジェンダー・大学/アカデミアの交差——ライフストーリーの記録』(中谷文美編、2022年3月)を刊行した。</p> <p>本プロジェクトは従来より、研究と教育との有機的結びつきを目指した分野横断型の共同研究プロジェクトであることから、この報告書を2022年度の教育に生かすこととしている。とりわけ例年、本研究プロジェクトの成果を生かした形で展開してきた「ジェンダーと人文学(＝クラスター・エッセンス(ジェンダー))」においては、報告書を履修生に配布し、文学部におけるアカデミアとジェンダーの交差点を考えさせる。この授業には、210名の履修登録があった。</p> <p>今後は文学部と文明動態学研究所の連携のなかで、研究と教育との有機的結びつきの発展・強化をめざすことになる。</p>					
関係教員等 (代表者※印)	氏名	所属	職名	役割	分担	
	今津勝紀	文明動態学研究所	教授	日本史学(古代家族史)		
	齋藤圭介	社会文化科学学域	准教授	ジェンダー社会学		
	清家章	社会文化科学学域	教授	考古学(古代女性史)		
	徳永誓子	社会文化科学学域	准教授	日本中世史		
	中谷文美	文明動態学研究所	教授	ジェンダー人類学、企画・とりまとめ		
	藤井和佐 ※	社会文化科学学域	教授	地域社会学、代表者		
	松本直子	文明動態学研究所	教授	ジェンダー考古学		
	光本順	社会文化科学学域	准教授	クィア考古学		
	和田郁子	社会文化科学学域	准教授	インド洋海域史		